

News Letter



足元の小さな悲鳴

この愛らしい動物、アマガエル(Hyla japonica Gunther)。初夏の夜の静寂を突き破るように鳴き交わすけたたましい声。これが、この体長3センチほどの小さなカエル達の大合唱とは、とても信じられません。

彼等はこの季節に繁殖期を迎えます。まず多くのオスたちが水田や浅い池などの水場に集まり、メスを求めて鳴き交わします。そこに、卵を産むための準備が十分に整ったメスたちが現われ、種族の維持が繰り返されているのです。

彼等のような小さな動物にも、我々の気づかないところで人間の脅威が及んでいます。

繁殖の場となる水場や、餌となる小さな昆虫と共に生活できる草地や樹林地等の生活環境が、人間の生活の場に置き換えられているというような直接的な脅威だけでなく、ロードキル（道路上で発生する動物の死亡事故）も深刻な脅威となっています。

彼等は主な生活の場となる樹林地と繁殖の場となる水辺の間を移動する必要があります。そこに出現した人間の移動のための道路。これらがぶつかりあってしまうために多くの犠牲者が出ているのです。

このような現象は、大きく



取り上げられることの多い自動車専用道路だけでなく、小さな農道等でも多々見られます。

近年、農地整備等の耕作地の整備と共に農道の直線化と舗装化が進んでいます。それに伴って農作業車以外の利用者が増えた結果、交通量の増加や利用速度の上昇等の事故要因をもたらしている

のです。ここにあげた写真も、水田脇にある幅4mほどの農道での犠牲者です。

私の調査中にも、多いところでは約10m間で40頭以上もの、このような姿となったアマガエルを観察したことがあります。この地点では、樹林地と水田との間に、住宅地とそれに付随する道路ができてしまいました。その

ため繁殖期の移動の際に道路を横断せざるを得ず、多くの被害者が出ているのです。

ここにあげた例は、ごく一部に過ぎません。多くのカエル類が危険を背負った生活を強いられています。例えば、都市部の庭先等にいるヒキガエル類は、常に道路での危険性と隣り合わせに生活しています。また、モリアオガエルは生活の場としてまとまった樹林地を必要とするのですが、森を分断するように整備され続ける道路のために多くの被害をこうむっています。

我々は大きな流れの中にいることは間違いありません。しかし、大きく取り上げられる自動車専用道路のエコロード化等のみではなく、見逃しがちな身近な動物達への脅威についても、常に目を向けていることが必要だと思います。

(本社調査室・北川徹)



ビオトープとは？

「ビオトープ」の単語は、ここ数年、造園、土木、生物にかかわる多くの技術者にとって馴染み深いものになってきた。しかし、まだ「ビオトープって何だろう」と素朴な疑問を持っている人もいだろう。興味を持って文献などを読んでいても、いざ、「ビオトープとは？」と聞かれると、何となくわかっていても明快には説明できない、という人が多いのではないか。また、トンボ池やホテル水路などの名目で造成されたごく限定された特殊な空間だけをビオトープとして捉えている人もいないのだろうか。

ビオトープの語は19世紀後半に「生息場所あるいは生物との関わりのある環境を意味する言葉」として提唱され

ている。その後、地理学、生態学などの分野でビオトープの定義がなされている。日本においては『生態学辞典』（築地書館）による「特定の生物群集が生存できるような、特定の環境条件を備えた均質なある限られた地域」という定義が一般的である。表にまとめたそれぞれの定義は若干ニュアンスが異なるが、概ね、以下の3点で共通している。

1. ビオトープは生物学的な空間単位であり、生態学的な意味を持つ。
2. ビオトープは生物群集、共同体としての生物集団が生存できる空間であり、個々の生物の生息空間ではない。
3. ビオトープとは特定の地形・土壌・気象・水象などの無機的条件を有する。

ありふれた風景も

このような概念に基づいて「何がビオトープなのか」と考えてみると、意外にもビオトープではない場所は少ないといえる。例えば、都会の小さな公園にはアブラゼミが鳴き、セミが幼虫時代を過ごす土壌がある。セミを捕らえるヒヨドリがいて、ヒヨドリが巣を架ける樹木があり、ヒヨドリの卵や雛を狙うハシブトガラスがいる。人為の影響を受けているとはいえ、そこには特定の無機的环境条件があり、生物群集が存在している。また、路傍の雑草地も同様にビオトープと呼べるだろう。つまり、何も生物が豊かな特別な場所だけをビオトープと呼ぶのではなく、日常生活で目にするありふれた風景もビオトープであるといえる。

杉山恵一氏（静岡大学教授）は「地球上は大小多種多様なビオトープで埋めつくされており、ヒトもまた自然の種であると考えれば、ビオトープの存在しない場所はほとんどないと言ってよいのである。」¹⁾と述べている。ただし、その後に続けて「現今の問題は、この人の過大な活動によってあらゆるビオトープが変質され、ヒト以外の構成種が減少・消滅しつつある点である。」¹⁾とも述べている。このように考えると「ビオトープをつく

■ビオトープ (Biotop) の定義■

◆語源・・・ギリシャ語の bios（生命、生物）と topos（場所、空間）の合成語

【生態学の分野】 生息場所、あるいは生物との関わりのある環境を意味する言葉として19世紀の後半に提唱された。（*1）

【地理学の分野】 ・パッフエン Paffen, K. 生物集団として特に植物群落に着目し、最小の群落とそれが占める空間との統合体としての空間単位をビオトープと定義。（*2）

【地域生態学】 ・レーザー Leser, H. ビオトープとは、生物生態学的に把握される均質な空間単位であり、植生を中心とするユニットであるフィトトープ Phytotop と、動物を中心とするユニットであるツォオトープ Zootop 二つからなる。（*4）

【動物生態学】 ・ハーバー Haber, W. 「動物生態学では、ビオトープは一般に動物の生息場所を意味する。それは動物が分布する場所であると同時にそれが生息できるような立地でもある。より厳密に定義すると、ビオトープは共同体としての生物の生息場所であって、個々の生物の生息場所のみを意味するものではない。」

『生態学事典』（築地書館）・・・「特定の生物群集が生存できるような、特定の環境条件を備えた均質なある限られた地域」

<引用文献> *1～4 農林水産省農業環境技術研究所編『農村環境とビオトープ』（養賢堂） *5 武内和彦『環境創造の思想』（東京大学出版会）

る」という言い方はほとんどの場合は正確さを欠くことになる。正しくは「ビオトープの質を高める」とか「今あるビオトープを一旦破壊し、新たなビオトープをつくる」といったところだろう。そして、ビオトープの質を高めることにより、ヒト以外の生物に都合のよい環境をつくることが重要である。

また、亀山章氏（東京農工大学教授）はビオトープと緑化の関係について、「生物群集の生育・生息環境はビオト

プまたはハビタットと呼ばれることから、緑化はビオトープの創出を目的とした技術であるということが出来る」²⁾と述べている。このことは、今まで緑化は審美的な観点や機能的な観点から主に行われ、結果的に生物の生息環境が創出されてきたが、本来、緑化の行為そのものがビオトープづくり（生物の生息環境づくり）であり、したがって、緑化に際しては生物の生息環境作りの観点からもっと配慮がなされるべきであることを示唆している。

当たり前のこととして

以上、断片的ではあるがビオトープの概念・捉え方を整理してみた。近年、生きものに優しい造園技術、土木技術が盛んであり、このような技術は従来の造園技術・土木技術とは異なる特殊な技術として「生態技術」と呼ばれることがある。実際、ビオトープ

の計画・設計には生態系や生きものの知識が必要となり、究めて専門的な分野であるといえ、この分野の発展が期待されている。さらに、「ビオトープ」という御旗の下で行われる「生きものの豊かな環境づくり」だけにとどまらず、杉山氏、亀山氏の言葉から示唆されるように、造園、土木、また建築技術など全ての環境づくりに関する技術体系の中に「当り前のこととして」

生きものへの配慮が行われる時代が来て欲しいものである。

- 1) 杉山恵一 (1994) : 自然環境復元の実践的展開。ジャパンランドスケープ, 31, 122 頁
- 2) 亀山章 (1995) : 生態系保全緑化のあり方、小橋澄み治・村井宏編 : 『のり面緑化の最先端』ソフトサイエンス社, 14 頁

(高塚 敏)

違いを探そう！

ビオトープ実践編

●上の池公園は、ここにもともとあった上の池という溜め池を、住宅・都市整備公団が調整池を含む公園として整備し、さらに、調整池をトンボ等を目標としたビオトープとして整備したものです。1992年に竣工し、現在は高槻市が公団と協力しながら管理しています。我社でも、大阪支社の地元ということもあって、微力ながら管理やモニタリングのお手伝いをさせていただいております。

この2枚の写真は、今年の6月のものです。竣工から3年以上の歳月が流れ、植生もだいぶ復元し、トンボも15種類程度が生息するようになりました。しかし、まだまだ目標とするトンボ相や植生の復元には至っていないようです。

●さて、この写真をよく見比べてください。違いにお気づきでしょうか？よく見ると、下の写真の池のほとりの草が減っているのに気づくはずです。ふつう、公園の池のほとりが草ぼうぼうになってきたら、すっきり刈ってしまいたいですが、ここはビオトープですから、そんなことをしたらトンボをはじめとする生きものたちが、休息や繁殖の場を失って困ってしまいます。かといって、セイタカアワダチソウ等の大型の帰化植物が著しく繁殖すると、飛翔する空間すらなくなってしまう、やはり多くの生きものたちが困ってしまいます。そこで、上の写真の状態からセイタカアワダチソウとアメリカセンダングサだけを選んで草取りをした様子が、下の写真なのです。このように、ビオトープには、生きものの暮らしに配慮した細やかな管理が望まれています。

(逸見一郎)

大阪府高槻市 住宅・都市整備公団阿武山団地 上の池公園ビオトープ



ライトトラップボックス法

＋カーテン法
より高い効果

ボックス法とは？

昆虫調査では、一般的に次の3つの採集方法を行います。

- ①任意採集（網または素手で採る）
- ②ベイトトラップ（エサでおびきよせる）
- ③ライトトラップ（光に集める）

このうち、ライトトラップには、カーテン法とボックス法の2つがあります。

カーテン法は、光源の前に白い布を張り、飛んできた昆虫をついっと毒ビンで採集するやり方です。

一方、ボックス法では、図1のような器具を使います。

ボックス法の良さは、カーテン法に比べ

- 人手があまりかからない
（夕方設置して翌日回収）
ゆえに
∴たくさん設置できるから調査範囲が広くてもOK
- 一晩中ライトを点灯できる
- ライトに集まった昆虫をランダムに採集でき、捕獲部に入った昆虫をすべて捕獲できる（毒ビンで採集する場合、個人差により捕獲量にむらがある）
ゆえに

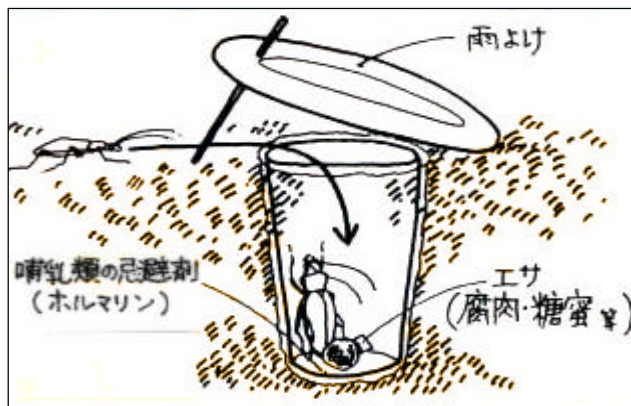
∴地点ごと・環境ごとの一定条件下での比較がある程度可能などが挙げられます。

しかし、次のような問題点もあります。

- 捕虫器に大型の甲虫や蛾が飛びこんだ場合、死ぬまでに時間がかかり、暴れ回って他の虫体が

破損する

- 特に小型の蛾類では、鱗粉が落ちて同定できなくなるものが多い
- 蛾とその他の雑虫と一緒に採集されるため、仕分け作業が大変である。また、全ての昆虫が鱗粉まみれになり、そのままでは同定しにくい
- 光源に飛来しても、ろうと部に落ちこまない昆虫も多数いる



・・・ベイトトラップ・・・

- 地面に腐肉などを入れたプラスチックのコップを埋めておく。



・・・ライトトラップ・・・
カーテン法

- 白い布を張り、その前に光源（ブラックライトを使うことが多い）を設置する。飛んできた昆虫を毒ビンで採る。

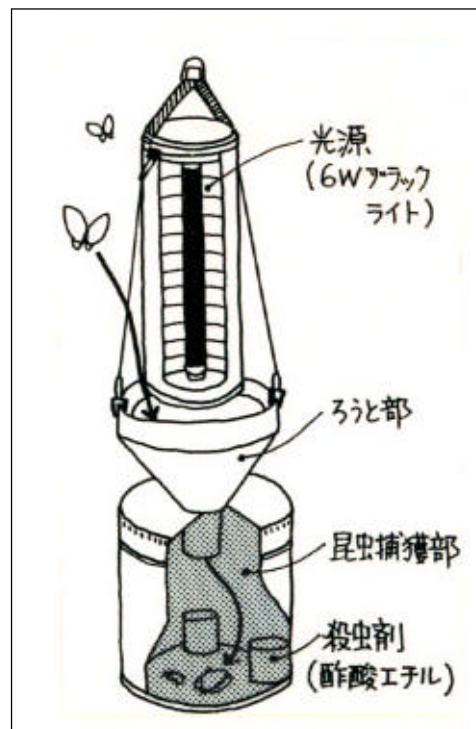


図1 ボックス法に用いる器具

カーテン法 vs. ボックス法

我が社では、1994年の北関東でのダム調査で初めてボックス法を実施しました。1回目は他社から器具を借りたのですが、調査会社が調査器具を借りるのも情けねえ、ということで、2回目からは特製ボックスで調査に臨みました。

表1◆方法別確認種数 (単位: 種)

ダム 採集方法		A	B	C
任意採集		334	389	306
ライトトラップ	カーテン法	581	573	616
	ボックス法	365	512	343
ベイトトラップ		79	93	109

余談ですが、このボックスは気密性を高める工夫をほどこしており、現場にやってきたアドバイザーの先生に「良くできている、虫体の破損が少ない、トレビアン、これは売れますよ、特許を取りなさい、ちなみに私もこれをまねて作っていいですか」等々のお褒めの言葉をいただき恐縮至極でした。

閑話休題。前述のダム調査では、ボックス法だけでなく、任意採集・ベイトトラップ・ライトトラップカーテン法も同時に行いました。

採集法による確認種数の違いを比べると、カーテン法のほうがボックス法よりも多いことがわかります。

(表1)

しかし、それぞれの方法でのみ捕獲された昆虫の割合を比べてみると、ボックス法のみで確認された種数は全体の約1割5分程度となっています。

この結果から、カーテン法に加え、ボックス法を行うことで、調査地の昆虫相をより高い精度で把握できたと考えられます。

今後の課題として、これらのダム調査のデータをより詳しく解析し、調査方法選定の資料としたいと思います。また、ボックスにも若干手を加えて改良し(接着部の強化、雨対策など)、より強力な武器としていくつもりです。

(本社調査室・宮畑貴之・伊藤透)

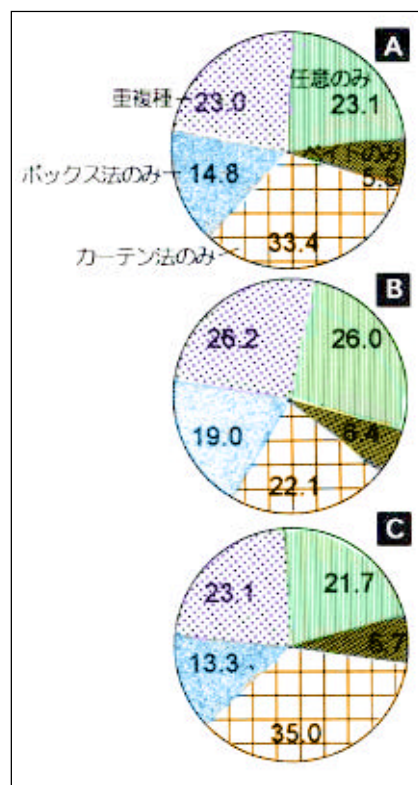


図2◆方法別確認種数の割合

生物調査入門

植物調査物語

その1. 調査員の性(3か)

植物相調査を現場に入ると、たいがい時間くらいパーッと記録すれば、新しく記録する種もへってきます……



どうして希少種ばかりに目がいってしまうのです

まあ、別にそれくらいふつうです

スゴイ、よくみつけましたね!

しばらくすると希少種と思われるフツも発見!!



おお! こいつは まさしくエビネじゃ(らん科)

しかし、小さくて(4月頃)なんとなくあやしい気もするけれど、3ヵ月後にも一度調査に来るから今回は一応エビネということに……

3ヵ月後

3ヵ月後

3ヵ月後

1枚葉の室生

1枚葉の室生

1枚葉の室生

1枚葉の室生

1枚葉の室生

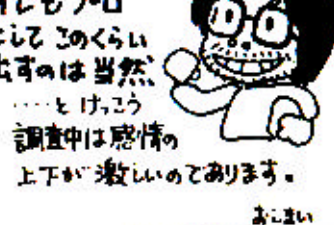
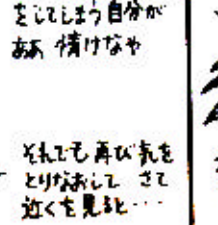
ガクアリ

この程度のおさがいまじい自分がある情けなや

すると

しかもクマガイソウまで生えている

やはりオレもフツとしてこのくらい出すのは当然……とけこう調査中は感情の上下が激しいのであります。



鳥

類の翼は、閉じている時と開かれた時ではまるで印象が違い、驚くことがある。それが一枚ずつになって手元にあると、今度はデザインの巧みさや不思議さに深く感心させられるのである。

本書は鳥類の羽根のみを扱った検索図鑑である。収録されているのは著者の笹川氏が16年間に収集した162種で、主に日本で普通に生息する種を扱っているが、後半には日本では迷鳥であるクロハゲワシ、動物園などの飼育種であるエミューやアフリカハゲコウなど外国産種も収録されている。

図版は全て笹川氏の手によるもので、基本的に、野外で目につきやすく、飛翔に重要な部位である風切羽根や尾羽根が示されている（小型種から中堅種の羽根では実物大）。これが、部位ごとに鳥体に生えている順に並べられ、検索に役立つ特徴などが添えられている。

本書は、鳥に関心を持ち始めた方にお薦めしたい。様々な色彩に富んだ羽根を眺めるだけで、きっと色々な発見があると思われる。

拾った羽根の落とし主を調べるには巻頭の「羽の部位別特徴」でしっかり部位を特定してから、巻末の「具体的

の精密さに多少の不安があるので、生態写真図鑑などと併用するとよいだろう。また、著者が収集した羽根を図版に利用しているため、羽根の欠損部がそのまま表現されているものがある。著者が収集できなかった羽根は描かないから、例えば風切羽根において、その種の持つ風切羽根を全て図示できない場合もある。加えて、部位の配列の統一など図鑑としての使い勝手の良さに配慮することも望まれる。

近年、鳥に関心を持つ人の急増に伴って、フィールドガイドや目・科レベルの図鑑では優れたものが多数出版されている。しかし、本書のような羽根専門の図鑑となると、日本においては他に類をみない。（洋書には鳥類の足跡や羽根などのフィールドサインを扱った類書がある）。今後このような分野の書籍は、ますます需要が高まると思われ、最初の試みとして大変意義があるものと思う。

（本社調査室・佐藤美穂子）

日本の野鳥 羽根図鑑

笹川昭雄

世界文化社◆定価 7,800 円

な羽根の調べ方」に沿って検索する。落とし主を探し出したら、決め手になった特徴などを図鑑の余白に書き込むのも面白い。

ただ、検索図鑑としては本書の図版は今一つ未熟であり、形状や色彩など

『ラ

ンドスケープデザイン（Landscape Design）は『ジャパンランドスケープ（JL）』の企画・編集に携わっていたマルモ・プランニング社が本年6月に創刊した新雑誌である。この雑誌のコンセプトは「人と自然が交感する（共に生きる）ニューデザイン」で、創刊の案内には次のような文章が書かれている。

一バブル経済の崩壊、「阪神・淡路大震災」と立て続けに日本を襲った人災・天災により、今日、日本社会は大きな変革を迫られています。「カタチ」あるものはいつか崩れることを、この大震災は教訓として私たちに残してくれました。私たちは「何か大切なコトを見失っていないでしょうか。「カタチ」のみを追求めていた近代合理主義に支えられた「デザイン」の時代が終焉を迎えつつあり、「地球環境時代」と言われる中で、人と自然が共に生きていくための新たなランドスケープの世界にこそ、私たちが真に求める次代のデザインの姿があるように思えてなりません。 —

私には、この言葉にマルモ・プラン

ニングがこの雑誌を作る姿勢・目的の全てが示されているように思える。確かに、今まで環境づくりにおいて「カタチ」のデザインすなわちビジュアルな面が重視されていたのは間違いない。もちろん視覚の動物である人間が使う空間である以上、ビジュアルな面

LANDSCAPE DESIGN 季刊ランドスケープデザイン

マルモ出版◆定価 2,580 円

で質の高い空間づくりが要求されることは事実だ。しかし、今日の最大の課題である「人間と自然の共生」という観点から環境づくりを考えた時、ビジュアルではない（目に見えない）部分の重要性がクローズアップされてくる。

例えば、施工段階でどれだけ環境負荷を小さくすることができたか、また、土壌、風、雨水など普通は視覚的に認知されない無機的环境に対してど

れだけ配慮することができたか、極端な例では、（遺伝子レベルの問題として）在来の樹木を活用しているか、などである。さらに、利用という観点から、阪神大震災で実証された公園の機能も普段は目に見えないものであるし、また、公園そのものを作ることよりも、公園を利用する人々の生き生きとした姿のほうが大事かもしれない。このような視点から「環境づくり」を捉え、情報を発信していくことの重要性を強く感じる。

創刊号の中で、「自然」に関連する記事としては以下のようなものがあり、それぞれ興味深い。是非、定期購読をお薦めする。

- 都心のビルに花鳥風月の山
～アクロス福岡のステップガーデン
- 庭を能くする建築家・第1回
～SUM建築研究所サワガニと小鳥が先に引越す住環境づくり
- 水系一都市と自然生態系をめぐる
ライフライン

（高塚 敏）

様々な分野の人が、様々な角度から 情報を提供し合って

◆第26回緑化工学会研究発表会

1995.6.6 於◆京大会館 主催◆日本緑化工学会

最近、エコアップ、ビオトープ等の仕事で、「このような群落にしたい！」と目標となる群落を設定することも多い。では、どうしたらその群落をより確実に、より早く、創造または復元できるかと問われると悩んでしまう。それは、目標とした群落を構成する種ひとつひとつの生育環境、生活史（一年を通じて、いつ展葉し、開花し、結実するのか、発芽してからどのくらいで開花、結実するか等）が解明されていないこと。さらに、播種するにも、苗木植栽するにもその方法に関する情報が少ないからである。

そんな中、第26回緑化工学会研究発表会に参加し、興味深く参考になる発表を聞くことができたので紹介したい。

私の聞いた一日目の発表は、種子の発芽、苗木の成長等についての発表が

多く、その中で特に関心を引いたのは「ワンド・水生部の植生と群落構成種の発芽率」「現地採取植物の利用に関する基礎的調査」「在来木本植物の発芽・初期成育特性（1）」等である。

これらの発表に共通しているのは、在来種の種子を扱っていること、在来種は発芽率が低いとされているがその課題を突破すべく、どのような条件で発芽率が高くなるかを実験していることである。例えば、いつ種子を採取すれば発芽率が高いか、水分条件や温度条件による発芽率の違い、いつ播種をしたら発芽率が高いか等の実験をしている。これらの発表から、発芽、初期生育の特性には様々なタイプがあることがわかった。今回実験された種の播種による植生回復については、今後、非常に参考になる。しかし、発芽特性が明らかにされた種は非常に少なく、

様々なタイプの群落を復元するためにはその構成種の発芽特性を明らかにする必要がある、残された課題は大きい。

ただ、私達、調査を主な仕事とするものにとって、発芽特性の実験はむずかしいが、情報を野外で収集することは可能であろう。例えば、調査の際、明らかに充実した種子を見つけた際には、種名、日付を記載していくようなことを積み重ねれば、種子の採取時期の選定の参考になるだろう。

このように、在来種による植生の回復という取組みがやっと始まった状況では、様々な分野の人が、様々な角度から情報を提供し合って取り組むことが必要で、誰かがやってくれるのを待ってばかりいてはだめなのかなと反省した一日となった。

（大阪支社調査室・石山麻子）

良いものは残す方向で、その上で改善を

◆第11回水郷水都全国会議『都市河川新時代』

第一分科会「まちづくりと川づくりの一体化」

1995.7.29 於◆横浜市教育文化センター 主催◆水郷水都全国会議実行委員会

水郷水都全国会議は、琵琶湖の水質保全に取り組んでいる滋賀県の呼びかけで1984年に開催された「第1回世界湖沼会議」を契機に発足しました。

この会議に参加した市民らが集まって、木原啓吉氏（千葉大教授）を代表に全国の水辺をテーマとして河川、湖沼、湧水等の保全と再生について議論を重ねてきました。「親水権」「川と森との連携」など、新しい提案をし続けながら、先進事例を学び合い、交流を深めています。

開催地は持ち回りで、11回目を迎える今回は横浜で開かれました。全国各地より、水環境の保全・再生やまちづ

くりに取り組んでいる市民をはじめ、自治体職員、河川管理者、事業者、プランナー、学生ら約900人が参加しました。

私は生物の技術者ではありませんが、第一分科会の「まちづくりと川づくりの一体化」に参加しました。その中で特に、鹿児島県防災フォーラムの上野孝敏氏の「現代人の川づくり戒める岩永三五郎：鹿児島甲突川の五大石橋の保全運動」の話は興味深かったです。甲突川には、岩永三五郎が築いた五大石橋の1つ西田橋があるのですが、今現在も、治水対策に役立っているそうです。ところが、県は初め「西

田橋等を残す治水対策の方が流域を守ることと合致する」と言っていたのに、今になって西田橋を撤去すると言っているそうです。

個人的な感想として、良いものは残す方向で考えて、その上で改善できるところを変えていけばいいのではないかと思います。

今後、西田橋がどうなっていくのか見守っていきたいと思います。これからも、この水郷水都全国会議が長く続いて一般の人にも幅広く知られることを望みます。

（本社管理室・梅村浩）

■イワナという魚を御存じでしょうか？ 岩魚（いわな）と書くように普通は岩のゴロゴロしている河川上流域の溪流に生息していますが、一旦海に下って、産卵のために再び河川を遡上するものもいることはあまり知られていません。

■一般的に、イワナはアメマス（エゾイワナ）、ニッコウイワナ、ヤマトイワナ（キリクチ含む）、ゴギの4つの型に分けられており、主に北海道や東北地方に分布する降海型（一旦海に下って遡上するタイプ）をアメマス、河川残留型をエゾイワナと呼びます。今回はこのアメマスとエゾイワナに関するお話です。

■所は三陸海岸に流入する小さな独立河川でのこと、久しぶりに東北のきれいな川での調査とあって、嬉々としてヤマメやアユを捕まえる我々の上流側から一人のおじさんがやってきました。みればおじさんはあやしげな網を携えて、腰には重そうにビクを下げているではありませんか。鋭い眼光と太い腕にタダナラヌものを感じた私が捕らえた魚を見せてくれるよう頼むと、「今日はあんまり捕れてないけどよー」と言いつつも放り投げた魚をみてビックリ！何と30cm前後のイワナやヤマメばかりがゴロゴロしているではありませんか。

■とくにそのイワナたるや河川残留型のいわゆるエゾイワナで、一目でネイティブとわかる見事な個体で、頬擦りしてチューしたくなるほど美しく、のどから手が出るほど欲しかったのですが、おじさんにねだってもくれそうにありま



せん。「よう～し俺も捕ったる～！」と、調査への意欲がメラメラと燃え上がったことは言うまでもありません。

■が、しかし、その後もヤマメやアユは

ある日のフィールド・ノートから

イワナとアメマス

たくさん捕れるけど、なかなかイワナは捕れず、どうにかこうにか捕まえたイワナは銀ピカの魚体に大きな白斑がある正にアメマスと呼べるタイプ。ところがこれが20cmくらいいの小さなアメマスで、その後も十数cmのチビイワナを2～3匹と、イワナに関しては貧果に終わりました。

■一般に河川残留型よりも降海型の方がはるかに大きくなるのですが、我々の捕ったアメマスが、おじさんの捕ったイワナに及ばないという結果に、職漁師の技もさることながら、あのあやしい網の威力にも恐れいることとなりました。

■さてこの諸々の話の中には河川の環

境を評価する上での重要な事実が隠されていることにお気づきでしょうか？

■まず、大きさはどうあれアメマスが生息しているという事実、これは海から遡上することができるといこと、即ち堰堤等による障害がなく遡河回遊魚の産卵場所として河川が正常に機能しているということを如

実に物語るものでもあります。（もっとも我々の捕まえた小さなアメマスが降海個体となるかは疑問ですが、おじさんの話では大きなアメマスもいるよとのことでした）それともう一つ、放流の一切行われていない小さな川でありながら、でっかいイワナやヤマメがたくさん生息しているという事実。これはイワナやヤマメが大きくなれる生産性の高い河川であるということを反映しています。イワナやヤマメは主に水生昆虫などを補食する肉食性の種のため、餌生物をたくさん生産し、魚たちが我々のようなヘボ調査者や、イワナ取り名人のおじさんから身を守れる隠れ家がたくさんあるというような、豊かな河川でないとなかなか大きくなれないのです。

■ただ単にイワナがいた、ヤマメがいたというだけなら簡単ですが、ここにこんなイワナがいて、このイワナが何を語りかけているのか、ということ聞きとれる調査者になりたいなあ～と思いつつ、今後雪辱戦に燃える今日この頃です。

■ちなみに我々の名誉のために言っておきますが、この後の調査では投網1打ちでヤマメを50匹以上捕獲したという「大漁」もあったことをつけ加えておきましょう。（本社調査室・浅尾勝彦）

編集後記

この業界で、少しでも役立てるものになればと考えつつ、地道な姿勢で作っていきたいと思います。社内だけでなく、多方面からのご意見も載せられるようなネットワーク的情報誌にできれば本望です。（本社管理室・西邑恵子）

【発行】……………株式会社地域環境計画
編集●西邑恵子・南谷佳世

■東京本社

〒154 東京都世田谷区桜新町 2-22-3 NDS ビル

TEL 03-5450-3700 / FAX 03-5450-3701

◆営業窓口……………逸見一郎・西邑恵子

■大阪支社

〒154 大阪府高槻市古曽部町 1-1-8

TEL 0726-84-3182 / FAX 0726-84-3184

◆営業窓口……………中山香代子・津田洋子

このたび、弊社のPR誌として「地域環境計画 NEWS LETTER」を発行することになりました。この小冊子は、私たちがフィールドで得た情報や経験を中心に構成し、また、読者の方々の仕事上少しでもお役に立つような情報を掲載するように心掛けました。編集にあたっては、担

NEWS
LETTER
発刊に寄せて

当スタッフを初め、社内の執筆者が予想以上に力を入れてくれたおかげで、当初の予定より立派なものになってしまいましたが、今後もこの第1号に負けないような誌面作りを目指したいと思います。ご声援の程をよろしくお願いいたします。

（代表取締役社長・高塚敏）